

幼児教育における子どもの言葉と言語環境に関する考察

坪井貴子*

はじめに

言葉は人間を人間たらしめているものの一つであるため、古くからそのメカニズムを明らかにしたいという人々の欲求を刺激して長く研究に取り組まれた分野である。特に、乳幼児の言葉やコミュニケーションに関する研究は言葉を獲得する時期にもあたるため、いろいろな側面から研究が進められてきた。たとえば、胎児の段階で母語を聞いていることはすでに常識となっている。生まれてからの言語に関する研究としては、乳児、幼児段階でどのように言葉を獲得していくのかに関する研究（今井, 2019、針生, 2015）、文法の発達研究（岩立, 2015）、読み書き能力の研究（高橋, 2015）、語用能力の研究（松井, 2015）、言葉と思考力の関係（今井, 2020）、言葉の発達と経済格差の関係（内田, 2014）、また会話に現れる子どもの自己に関する研究（小松, 2015）などがあげられる。本研究は言葉に関する研究としては緒についたばかりであるため、まずは、保育所および幼稚園の活動におけるいくつかの言語活動場面を取り上げ、そこから子どもの言葉を検証し、どのようにしたら言語活動の充実につながるのかを考えていきたい。

1. 幼稚園教育要領における「言葉」「言語活動」の扱い

まず、領域「言葉」におけるねらいと内容をみることにする。

<ねらい>

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉がわかるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

<内容>

- (1) 先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常の挨拶をする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像する楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

また、今回の改訂で新たに加わった「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」と記載）

* 東海学園大学教育学部

のうちの「(9) 言葉による伝え合い」には、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」と記述されている。ちなみに、10の姿には、3つの資質・能力が反映されているとされている。

さらに、「第1章総則 第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価 3.指導計画の作成上の留意事項 (3)」では、「言語に関する能力の発達と思考力等の発達に関連していることを踏まえ、幼稚園生活全体を通して、幼児の発達を踏まえた言語環境を整え、言語活動の充実を図ること」と記載されている。

以上の通り、幼稚園教育要領の言葉の領域におけるねらいと内容と10の姿の「言葉による伝え合い」から、幼児は言葉について、①話す、聞く、コミュニケーションに関すること、②読み、書きに関すること、③言葉そのものの美しさや楽しさに関して発達が望まれていることがわかる。これに加え、文部科学省の幼稚園教育要領解説によると、内容(2)「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことなどを自分なりに言葉で表現する」に関して、「相手に分かるように言葉で伝えようとすることで、自分の考えがまとまったり、深まったりするようになり、思考の芽生えも培われていく」と説明されており、言葉のもう一つの側面である思考との関連も幼児教育において意識すべき側面であることがうかがえる。

2. 保育場面における子どもの言葉及び言語活動の実際

以下は筆者が保育参観を行って記録した言葉に関する事例である。ここでは、(1) ごっこ遊びのやり取り、(2) 集まり場面での一人ずつの発表、(3) 遊びや保育活動における文字や書き言葉、手紙を取り上げる。言葉に関する場面としては極めて限られたものになるが、幼児の実際の言葉と保育環境について明らかにする一助としたい。

(1) ごっこ遊びの中にみられる言葉の特徴と意義

以下にあげのごっこ遊びのやり取りは、筆者が修士論文のために1989年にA保育所で収集したごっこ遊びのやり取りの一部である⁽¹⁾。ここにあげた3つのごっこ遊びの記録は、やり取りをマイクロレコーダーで録音し、それを逐語記録したものである。

① 歯医者ごっこ (5歳女児4名、保育室)

ここでは、4人の女児がそれぞれ歯医者役、看護師役、母親役、治療を受けている子ども役をとっている。以下のやり取りは遊びの途中で、治療を受けている場面である。

母 親：(子どもに対して) 私ここで待ってるね。
母 親：(歯医者に対して) 先生、月曜もあるんでしょうか？
歯医者：そうね、来ないといけませんね。(治療のふりをしながら)。
子ども：先生、薬ないん？
歯医者：あるよ。後で出すからね。
母 親：後でもらってあげるからね。

短いやり取りであり、文字だけでは子どもたちがどのように話しているのかそのニュアンスが伝わらないのが残念であるが、このごっこ遊びでは、歯医者は歯医者らしく、母親は子どもを気遣っている雰囲気がとてもよく伝わってきたことを覚えている。ごっこ遊びとは、子どもが身の回りの社会を観察してそれを取り込み、それを遊びとして再現することにより学習する営みである。ここでのやり取りから、ある種

の立場の人の役割を取り込む際に、その人がどういうことを話すのか、またその背景にある感情なども含めて取り込んでいるであろうことがわかる。これが可能であるのは、5歳児の子どもたちがすでに言葉とコミュニケーションに関する基本的な知識を身に付けているためであろう。

②警察ごっこ（4歳男児1名、4歳女児1名）

次のごっこ遊びは、ごっこ遊びとしてはまだ未熟なものである。というのは、4歳児には時々見受けられる遊びであるが、自分のつもりが先行していて、まだ他の友達とストーリーや役やイメージを十分共有することができていない段階にあるためである。これも遊びの一部を紹介する。

男児：ブーン、ブーン。

男児：了解、了解。

男児：車が動かなくなった。

男児：プシュ、プシュ（車の周りで修理するふりをする）。

（中略）

男児：犯人、了解。犯人、了解。

（中略）

男児：隊長、隊長・・・おまえ隊長になる？（隊長役が必要だと思ひあたり、女児に言う）。

男児：犯人が、犯人が・・・。

女児：捕まりましたって言わにゃ。（男児が言いよんだので、助け船を出した）。

男児：犯人を見つけました。

以上のやり取りは上に述べたとおり、男児の自分だけのつもりが先行しており、途中で隊長役が必要になって女児に持ちかけた。このごっこ遊びの①の歯医者ごっことの特徴的な違いは、発達段階の違いによる遊びの完成度の違いだけでなく、題材の違いである。①は子どもの現実生活から題材が取り上げられているのに対して、②はテレビなどの間接経験から得られたものが題材になっていると思われる。間接経験に基づくごっこ遊びのありがちな特徴は、題材が子どもの現実生活によるものと違って、子どもが取り込める情報が少ないため、遊びとして再現される場合も内容が薄くなり深みや広がりに限界がある点である。ただし言葉に関してみると、子どもの経験として劣るところばかりとは限らない。このごっこ遊びのように間接経験による題材では、子どもたちが普段接することがない題材を扱っているため、出てくる言葉にも子どもたちが普段使わないような言葉も含まれている。実際、子ども向けのアニメや戦隊ものの番組では、難しい言葉が結構扱われている。しかし、子どもたちは、映像に助けられて、わからない言葉があってもストーリーをだいたい理解しているのか、あるいは文脈から知らない言葉も理解しているのではないだろうか。そして、このごっこ遊びのように、「犯人」や「了解」等という言葉を使いこなしているのだと思われる。したがって、このようなテレビ番組のような間接経験によるごっこ遊びの題材も、子どもにとって意味があるということができるようだ。

③お家ごっこ（5歳女児4名、保育室）

このごっこ遊びは5歳児女児4名により園庭で行われたお家ごっこである。観察し始めたとき、ちょうどこのごっこ遊びが始まったところであった。役は遊びがスタートした直後に、必要に応じて決めていった。そのスムーズさから、遊び慣れたメンバーではないかと思われた。役は、母親、姉、妹、赤ちゃんである。下に記載したやり取りは、遊びの途中のものである。このやり取り以前に、小学生の妹の友達（姉役がこの時は妹の友達役をやった。1人2役である。）が遊びに来て、宿題をやったりおやつを食べたりして夕方になり帰って行ったというストーリーが展開した。以下のやり取りは、女児が妹の友達役から姉役

に戻り帰宅したところからである。

姉：お姉ちゃんが帰ってきたんよ。(役から離れて説明を加えた。)
母：お帰り、遅かったのね。
姉：うん、そうなの。
(中略)
妹：お母さん、もうご飯いらないから。
母：はいはい。
妹：もう寝るわ。お姉さん、おやすみなさい。
姉：明日早く起きなきゃいけないのよ。6時に起きなきゃいけないの。
私、ご飯いらないから、おやすみなさい。
(中略)
母：6時よ。
姉：もう6時よ。
妹：ママ、ご飯。
母：まだ夜よ、まだ夜の8時よ。
妹：だってお姉ちゃんが言ったんだもん。
母：あそこの時計遅れてるんだから、早いんだから。・・・・・・・・・・・・・・・・a
(中略)
母：お母さん、お勤めなんよね。
妹：お母さん、行ってらっしゃい。・・・・・・・・・・・・・・・・b
母：まだでしょう、まだ夜の8時よ。

ドラマの一場面でも見るように、子どもたちが大人の生活でありそうなことを良く取り込んでいることが窺える場面である。特筆すべきは、やり取りの中で、ごっこ遊びの状況の捉え方の行き違いを、遊びの役柄を取ったまま巧みに解消しようとしたところ (a) や、相手の台詞から相手の意図をくみ取って対応しようとしているところ (b) である。(a) にいたるやり取りでは、状況として母親役が「6時よ」と時間を設定した。それを聞いた姉役と妹役の女兒は朝の6時だと思い「ご飯」を母親に要求して遊びを展開させようとした。これは、自分たちはその前の場面で夜になり寝たつもりであったためそうしたのであろう。しかし、母親の方は夕方6時のつもりであったため「まだ夜の8時よ」と応じて行き違いを修正した。そしてさらに「時計が遅れてるんだから、早いんだから」とやや矛盾は生じたものの、これも、現実の生活でもあり得る、時計が合っていないので行き違いが生じたという説明をつけて行き違いを解消しようとしたのである。子どもや発達段階によっては、遊びを一旦止めて、役から離れて「今は朝だということにしよう」あるいは、「夜にしよう」と状況の確認をする方法をとることもあるが、ここでは役をとったまま、遊びを維持したまま行き違いを解消しようとしたことが巧みである。

(b) も似たようなケースである。この時は母親役は役を離れて「お母さんは(専業主婦ではなく)お勤め(をしている人)なんよね」と属性を伝えたとと思われる。というのは、妹役が「お母さん、行ってらっしゃい」と母親役を勤めに送り出そうとした言葉に対し、母親役が「まだ夜の8時でしょう」と答え、遊びのストーリーを母親役が出かけるという流れにしなかったためである。しかし、ここで特筆すべきは妹役の言葉である。ここでは母親役の言葉の意味を深読みしすぎではあったものの、相手の言葉の意図を読み取りながら反応していることがわかる。したがって、子どもたちはごっこ遊びのやり取りの中で、相手の

意図を読み取り、反応する練習をしているといえそうだ。

ところで、言葉の分野には「語用論」というものがあり、子どもはある程度まで言葉の言外の意味の理解ができないといわれている。そして、これが何歳から可能かということに関しては研究によって異なるとのことだ（広瀬, 2017、松井, 2015）。

(a) (b) はまさに語用能力の表れといえるであろう。この例だけでは何歳からそれが可能かは定かではないが、現実の生活場面では語用能力を発揮しなければならないようなことは少なく、むしろこのごっこ遊びのように、遊びの中のほうが子どもにとって身近な世界である上、子どもに適した話題や題材が豊富なため、コミュニケーションの練習場面として適しているのではないだろうか。

(2) 集まり場面での発表

保育場面では、集まりの場面で一人一人話しをする機会が設けられている。これは話しをする形態としてはフォーマルなものといえる。ここでは、B幼稚園の3歳児、4歳児、5歳児それぞれが集まりの時に一人一人話しをした場面の記録を取り上げ検討する。

① 3歳児の帰りの集まりの時の遊びなどの紹介

B幼稚園 2020年1月29日 3歳児

帰りの集まりの時くじ引きが行われ、その日に遊んだことなどをクラスの子どもたちの前で紹介する人が選ばれた。子どもたちは、先生と一緒に声をそろえて、「しょーかい、しょーかい、なーんのしょーかい？」とこのクラスのお約束の始め方であろう言葉を節をつけて言い、Eの話をも促した。

E : 「ノートを作りました。」

担任: 「Eちゃん、一番工夫したところはどこ？」

Eはノートに描かれているハートを指さした。

次はEがくじを引いて、Fが紹介する担当に選ばれた。

F : 「ほうきを作りました。」

担任: 「みんなが作るのと違うね。」

(ほうきはすすきとビニール袋とセロテープで作られていた。)

担任: 「何か言いたい人？」

G : 「ビニールできらきらしてかっこいい。」

② 4歳児のお楽しみ会の練習の後の振り返り

B幼稚園 2020年2月14日 4歳児

この日はお楽しみ会の前日で、このクラスの出し物の合奏とブレイメンの音楽隊の劇の練習を行っていた。練習が終わり、担任が「今日は最後の練習だったけどどうだった」と声をかけた。以下は子どもたちの振り返りの発言である。

担任: 「言いたいことがある人？」

H : 「最後の練習だけどがんばれてよかった。」

I : 「最後の練習だけどみんなとがんばれてよかった。」

J : 「どろぼうをおどろかせるところがおもしろかったよ。」

- K : 「鳴くのが面白かった。」
L : 「練習最後だったけど、犬が鳴くところと驚かすところがよかったよ。」
M : 「最後の練習だけど楽しかった。」
N : 「どろぼうを猫が寝ているときに驚かせるところがおもしろかった。」
O : 「今日は最後の日だけど楽しかった。」
P : 「今日は最後の練習だけど、明日はお母さんが来るけどみんなが元気でやれたらいいです。」

③ 5歳児の集まりの時の話

以下の記録は、5歳児クラスの集まりの場面で、休みとバザーの時に何をしたかを一人ずつ紹介したときのものである。保育室に椅子を円に並べて座り、クラスの子どもたち全員が順々に紹介したため本来は子どもたちの発言はもっと多かったのだが、内容が重複しているものもあったためそれを省いて記載したのが以下の発言である。

B幼稚園 2019年11月19日 5歳児

- 「休みの時、友だちと空港公園で、楽しかった。」
「バザーで的当てで100点でうれしかった。」
「休みの時、ランドセルを注文してうれしかった。」 質問「何色？」
「バザーで焼き鳥を食べておいしかった？」 質問「何味？」
「休みの時お母さんとお菓子を作って食べておいしかった。」
「空港公園で〇〇とテニスをしたのが楽しかった。」
「休みにおばあちゃんの家で紙飛行機を飛ばしたのが楽しかった。」

全員のお話を聞いたため時間が長くかかったが、子どもたちはみんな他の人の話をよく聞いていた。

話の内容と状況が少し異なるものの、3、4、5歳児それぞれが集まりの場面で一人ずつ話しをした。これによると、3歳は「〇〇を作りました」という最も短い文により自分がどういう活動をしたかを紹介している。4歳児は、子どもによっては、劇の場面を取り上げて「〇〇が△△でした」とどこが楽しかったのか、面白かったのかを具体的に挙げることでできている。5歳児になると、「いつorどこで、〇〇を××して△△でした」とさらに具体的に話すことができている。限られた事例ではあるが、3歳児、4歳児、5歳児の構文の発達的变化がみられる。

④ サンタクロースへの質問

次の記録はC幼稚園の5歳児クラスの集まりで、近く行われるクリスマス会にやってくるサンタクロースへの質問を考えることになったときのものである。担任教師は、クリスマス会当日はクラス全員の質問をサンタクロースにできるわけではないと断ってから、一人ずつ質問を聞いた。この時も、クラス全員が質問を発表したが、重複したものは省いた。

C幼稚園 2019年12月3日 5歳児

- ・サンタさんは子どもの頃ってあるの？
- ・サンタさんはどこに住んでいるの？
- ・サンタさんはどのくらいプレゼントを持っていますか？
- ・サンタさんはお母さんがいるのかな？
- ・サンタさんは何歳ですか？
- ・サンタさんはどんな色が好きですか？
- ・サンタさんは幼稚園に行ったことがありますか？
- ・サンタさんはどんなアニメが好きですか？
- ・サンタさんはなんで空を飛ぶの？
- ・サンタさんの家はどこですか？
- ・サンタさんの誕生日はいつですか？
- ・どれくらいおもちゃをくれるの？
- ・サンタさんは世界には何人いるの？
- ・サンタさんは北極以外に住んでいるんですか？

これは、子どもたちが他の友達の前で一人ずつ語る形態の中でも、サンタクロースへの質問という特殊なものである。これを見ると、子どもたちの語彙や文法はほとんど問題ないことが分かる。そして、言葉を発する時には多かれ少なかれ想定されるのが、相手の存在であるが、ここでは質問であるので、まさに相手を想定しないと構文できない。その場には質問する相手は存在しないが、子どもたちが相手の立場に身を置いて考えを巡らせていることがわかる。そして、サンタクロースの不思議な点にちなんだ質問は「空を飛ぶこと」に関するものだけで、他の質問はサンタクロースに対しても自分たちと同様のイメージをもって質問していることが分かる。ここにあげた子どもの質問は、想像力との関連も考えられる。今後さらに検討を加えていきたい。

(3) 遊びや保育活動の中でみられる書き言葉

① レストランごっこのメニュー

B幼稚園 2019年11月19日（火） 3歳児

3歳女児5、6名が園庭でレストランごっこを行っていた。子どもたちがいる場所は木製のカラフルな柵で囲われていて、そこにはござが敷かれテーブルや長椅子が用意されていた。そばには砂でできた、上に色鮮やかな木の実が飾り付けられた大きなケーキや料理道具が置かれていた。子どもたちは真っ赤に色づいた落ち葉を、被っている帽子にテープでついたり、腰に巻いた新聞紙のスカートに貼り付けて飾っていた。(子どもたちが使えるように新聞紙もかごの中に重ねて用意してあり、テーブルにはセロファンテープも置いてあった。) 観察したときはレストランの準備をしているところだったのか、ノート状の冊子(A4の白紙を数枚重ねて二つ折りにして、その折り目をステイプラーで留めてあるもの)に子ども達は用意された色とりどりのマジックで字を書いていた。冊子は前日に子どもからメニューを書くものを要求されてこの日教師が用意したとのことである。そして、冊子の

一つには教師が子どもの要望で横書きで「めにゆう」と書いたものもあった。子どもたちもマジックで冊子に文字を書いていたが、ある女児は自分の知っているひらがなを書きたくなったのか、一文字ずつ色を変えて、「の、ね、わ、ま」の文字を2、3回ずつ書いているところだった。また、「めにゆう」を見て書いたと思われるものもあったが、それは練習のように1ページに3回ほど並べて書かれていた。ただし、「め」は難しかったのか「お」になっていた。もう一人の女児はまだ文字が書けないのか、興味がないのか、見開きに水色のマジックで「×」や短い縦線や横線を並べてたくさん書いていた。文字が並んでいる様子を表しているように思われた。

D幼稚園 2019年9月9日（月）4歳児

4歳児がレストランごっこを行っており、それに使用されたメニューを見ることができた。一つはA4の白紙を数枚重ねたもので、もう一つはそれより小さい白紙を数枚重ねてある。どちらも、片側にパンチで穴を2つ空けて、そこにスズランテープを通して綴じてある。それぞれのページには食べ物の名前がひらがなで書いてある。「おもらいす、りんごあいす、まーぶるかれーおむらいす、ぶるべりい、こうら、おこさませっと、いちごあいす、ばなあいす、ぶどうあいす、いちごぱん、めろおん」など書いてあった。「いちごぱん、めろおん」の「ち」と「ろ」は鏡文字になっていた。また、「おもらいす」や「めろおん」などの表記は、間違いというより、日頃耳で聞いて知っている言葉を表す音を苦心して表記したのかもしれない。

ごっこ遊びは子どもたちにとって総合的な学びが期待できるものであるが、これらレストランごっこは、子どもたちが文字を書く経験につながるよい機会となっている。そして、3歳児、4歳児それぞれが同じメニューを書いたことで、発達段階の違いがよく現れている。B幼稚園の3歳児で、まだ文字になっていない段階のものを記録しているが、これは「萌芽的読み書き」ないしは「プレリテラシー」と呼ばれるものである（高橋，2015）。

②手紙

C幼稚園 2019年9月17日 赤組

この幼稚園では2羽の合鴨を飼育していた。5歳児の当番が毎朝野菜を刻んで餌やりを行っていた。その1羽のリボンと名付けられた合鴨が前日から弱っていたそうだが筆者が訪問した日の朝、死んでしまった。リボンは箱に花と一緒に入れられており、クラスごとに子どもたちがそれを囲み、副園長先生が亡くなった経緯などを子どもたちに話された。その後も気遣わしげに様子を見に来る子どもがいた。その中で、4歳児の男児が自分が紙で作ったものをリボンの箱に入れてほしいと持ってきた。それを見ていた別の4歳児の男児も、自分もリボンに何か作ろうと思ったようで、走って保育室に戻っていった。保育室では一人の女児が、リボンに手紙を書いていた。そして、手紙が出来上がったのでリボンのところに戻り、男児が紙で作った作品と一緒にリボンの箱に入れてもらうために副園長先生にそれらを手渡した。副園長先生がその手紙を声に出して読まれた。手紙には「りぼんちゃん、はやくげんきになってね」と書かれていた。

上に書いたとおり、子どもたちは相手に対して自分の気持ち（好意）を表したいと手紙を書くようであるが、この事例のように、励ますべき相手や悼むべき相手に対しても、手紙で心遣いを示そうとすることが分かった。ただ、上の事例で分かるとおり死んでしまったりボンに対して「げんきになってね」は適当ではないが、手紙としての手持ちの表現が限られているため、その中で最も近いもの、ここでは相手を気遣う表現を選び出し使ったのではないかと思われる。

③ニュース、知らせたい内容を文にして書いて知らせる。

C幼稚園 2019年5月17日 5歳児

保育室の前に置いてある台の側面に模造紙の半分ぐらいの大きさの薄い色の紙が貼ってあり、それに「○○ぐみにゅーす」と書いてある。その用紙の一部が「やさいにゅーす」の欄になっている。そのそばに置いてある小さい机に用紙（はがき半分ぐらいのうす黄色の紙）とセロファンテープとマジックが置いてあり、子どもたちがその用紙にニュースを書いて貼っていた。そこには、「ぼくのしたのこうえんにかいがありました」「だんごむしが100いました」など書いて貼ってあった。野菜ニュースには「ピーまんのはながさきました」、「きいろイトマトのはながさきました」などが書いて貼られていた。

ニュースは、伝えたいことを文で表したという意味では手紙と共通している。ただし、手紙が個人的なものであるのに対し、ニュースの方は、書く内容が自分の発見であるところ、またそれを見てもらう対象がクラスの友達である点が大きく異なる。幼児教育では、5歳児でも必ずしも文字を書けることを前提として保育を行うわけではないと思われるが、自分の発見をこのような方法で友達に知らせることができるということを知り、それにより伝え合い、わかり合う経験ができることは子どもたちにとって新しい喜びにつながるであろう。

3. 幼児の言葉の発達を促す言語環境

ここでは、事例をもとに、言語環境に関して考察を加えたい。

(1) 言葉として表出される内容について

以上子どもの言葉の例として保育場面でみられたごっこ遊びのやり取り、集まりの時の発言、書き言葉としては、レストランごっこのメニュー、手紙、お知らせを取り上げた。これらからわかることは、まず、話し言葉にせよ、書き言葉にせよ、子どもが心を動かされるような多様な体験をして自分のうちに取り込んだものが表出される材料となるということである。それは必ずしも直接経験だけとは限らず、テレビ番組や絵本、図鑑などから得たものも含まれることが予想される。したがって、大人は子どもが多様な経験ができるよう心を配ることが重要である。

(2) 言語活動としての集まり場面での発表

集まりの場面で子どもたちがクラスの仲間に向けて一人ずつ話しをする活動は、直接的な言語活動にあたる。これに関しては、次のような考察が加えられうる。仲間の前で話をするということについては、子どもの発達段階に応じて保育者が子どもに話し方などを指導することも多いと思われるが、これにより子どもは仲間に向けた話し方がわかるとともに、自信を持って話すことができるようになる（宮川、2020）。また、岡本（1985）は、現実を離れた場面で不特定の一般者に向けた言葉を二次的言葉と名付けたが、集まり場面で用いられる言葉はこれにあたる。そして、二次的言葉を使うには自分の知っていることと相手の知っ

ていることの区別が必要となる。したがって、集まりの場面で発表することは、自分が話すことを聞き手は知らないため、聞き手にわかりやすいように、何をどのように話すとよいかを学ぶ機会になるともいえる。

ところで、先述したとおり、幼稚園教育要領の「言葉」の内容(2)「したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりしたことなどを自分なりに言葉で表現する」に関して、文科省発行の解説書で「相手に分かるように言葉で伝えようとすることで、自分の考えがまとまったり、深まったりするようになり、思考の芽生えも培われていく」と記述されている。これは必ずしも集まりの場面でのフォーマルな語りだけを指しているわけではないが、集まりの場面で友達の前で一人ずつ話すという機会は内容(2)に合致する。また、活動の振り返りとして話すという意味では、河邊(2017)が活動の振り返りが「深い学び」につながることを指摘している。どちらの指摘からも、言葉で自分の経験を語ることが学習や思考につながることを指摘されており、ここに集まりで話すことの意義が見いだせる。

(3) 書き言葉に関する言語環境

事例として収集できた書き言葉はレストランごっこのメニューと手紙、「〇〇ぐみニュース」でのお知らせである。書き言葉に関しては小学校入学前の5歳児がワークブックでひらがななどの練習を行っている様子を幼稚園で見かけることがある。しかし、今井(2020)は、文字に限ってはいないが、言葉が子どもにとって「死んだ知識」ではなく「生きた知識」になることの重要性を強調している。そういった意味でも、言葉を文字に表す場合も、まずは子どもにとって必然的な文脈で文字が使用される状況であることを尊重したい。文字を知っている、書けることは子どもにとって大きな喜びであろう。そして、事例にある通り、特に手紙は、文字により自分の気持ちを表したり相手を思いやったりすることができるものであることを子どもは理解している。したがって、必然的で子どもの気持ちを尊重した書き言葉にまつわる言語環境の設定が望まれる。

(4) 子どもの表出を受け止める環境

この章で、最初に言葉による表出の前提として、子どもの体験の重要性を指摘した。言うなれば言葉に表す材料となるもののインプットに関する指摘である。最後に、言葉に関するアウトプット面についても指摘しておきたい。子どもの言葉を育てるためには、表出しやすい雰囲気や、あるいは表出を受け止めてくれる環境が重要となるであろう。したがって、事例のように集まりの場面で話しをするような活動では、話し方だけでなく、聴く力も育てなければならない。そして、話したい、自分が発見した内容を知らせたい、やり取りをしたいと思える集団作りが肝要となるであろう。

おわりに

本論では、限られたものではあったが、保育場面における遊びや活動を言葉の側面から検討することができた。また、そこから言語環境のあり方について検討することにもつながった。ただし、幼稚園教育要領の領域「言葉」のねらいと内容に照らし合わせると、絵本や物語、日常的な挨拶ややり取り、また言葉の楽しさや美しさといった側面には触れることができなかった。そこで、今後は、保育場面における言語活動ならびに言語環境に関して、指導計画なども加えて、整理して網羅的に捉えていきたい。

また、昨今は子どもの読解力の低下が問題視されているが、これに関連して、今井(2020)は言葉と考える力の関係に関して、言葉の力でさらに知っている言葉が増え、考える力も鍛えられると述べている。そこで、小学校以降の学習につながる幼児の言語活動も焦点化していきたい。

註

(1) 筆者の修士論文「ごっこ遊びの展開過程に関する一考察」(1990)に掲載したものを使用。

【引用文献】

- 今井むつみ 2019 『言葉の発達の謎を解く』 ちくまプリマー新書
- 今井むつみ 2020 『言葉と思考力』 筑摩書房
- 岩立志津夫 2015 「文法の発達とそのつまずき」『発達』141 13-17頁
- 内田 伸子 2014 「日本の子育て格差—学力基盤力の経済格差は幼児期から始まっているか」内田伸子・浜野隆 『世界の子育て格差—子どもの貧困は超えられるか』 金子書房 1-18頁
- 岡本 夏木 1985 『言葉と発達』 岩波新書
- 河邊 貴子 2017 「遊びを中心とした保育とアクティブ・ラーニング」『幼児教育じほう』7 13-23頁
- 小松 孝至 2015 「会話と子どもの自己のあらわれ」『発達』141 24-28頁
- 高橋 登 2015 「子どもの読み書き能力とつまずき」『発達』141 29-33頁
- 針生 悦子 2015 「言葉の学習の立ち上がり」『発達』141 8-12頁
- 広瀬 友紀 2017 『ちいさい言語学者の冒険』 岩波書店.
- 松井 智子 2015 「語用能力の発達」『発達』141 18-23頁
- 宮川萬寿美 2020 「話し言葉の機能と発達」馬見塚昭久・小倉直子 『保育内容「言葉」指導法』ミネルヴァ書房
- 文部科学省 2017 『幼稚園教育要領』
- 文部科学省 2017 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館.